

「検定英語 I&II」授業における模擬テストの結果考察と課題

会津大学短期大学部

非常勤講師

桑田 カツ子

「検定英語 I&II」授業における模擬テストの結果考察と課題

桑田 カツ子

平成 25 年 1 月 7 日受付

【要旨】本稿は会津大学短期大学部における「検定英語 I&II」授業で実施した、TOEIC テスト形式の模擬テスト結果を分析し、考察をして知見をまとめたものである。まず、1 2 回の模擬テスト全体のセクション別とトータルスコアの平均を示し、全国の短大生の平均スコア²⁾と比較して考察する。次に、開講期別平均トータルスコアを示し、1 2 回の模擬テスト平均の推移を検証し考察する。続いて、複数回受験者のスコア上昇量と回数ごと平均トータルスコアを示し比較する。最後にこれら 3 つの分析観点からの知見を得て、今後の授業への課題とする。

英語コミュニケーション能力を測定する TOEIC テストの社会的ニーズが高くなってきた。当授業履修者の TOEIC テスト受験への関心も、以前より高くなってきたように感じる。本報告により、非英語専攻である会津大学短期大学部学生(以下、本学学生)の英語コミュニケーション能力は幅広く分布していることがわかる。この現状を認識し、学生の潜在的な能力を引き出し、英語を学ぶ意欲を高める授業へとつなげたい。

1. はじめに

2001年4月から非常勤講師として、自由選択科目である「検定英語I」（前期履修科目）と「検定英語II」（後期履修科目）を担当し、今年で11年目となる。初年度より一貫してTOEIC（トイック、Test of English for International Communication、以下TOEIC）テスト問題中心の授業を行ってきた。履修者は必ずしもTOEIC受験希望者とは限らず、自らの一般的な英語力向上、あるいは四年制大学への編入試験や英語検定試験に備える目的を持った学生が多いのが現状である。

授業形態は、学生がTOEICテストの問題を解き、教員が解説することを中心とした。しかし、単にTOEICテストの傾向と対策に偏らないように、英語という言語が持つ文化にも触れる授業を心がけてきた。2006年度からは、前期と後期末に模擬テストを実施し、履修者が自分の英語力を数値として把握し、客観的に認識する機会を設けた。

現在TOEICテストは日本の企業や大学で幅広く活用され、学習者の英語力診断や目標の設定だけでなく、単位認定、英語授業選択のプレースメントテスト、そして入学試験や編入試験としても活用されている。このような状況下、僅かではあるが、「検定英語I&II」履修者にも以前とは違った変化を感じるようになった。それはTOEICテスト受験への関心が強くなってきたことである。以前の受講理由でよく聞かれた、「英語が好きで自己目標設定の為」「編入試験の為」に加え、「履歴書に記載の為」という声が増えてきた。それは学生が社会におけるTOEICテストへの関心を意識してのことだろうと考えられる。

学生の関心を更に高め、幅広い意味における英語力を伸ばすには、非英語専攻である本学学生の英語力の現状の一端を知る必要がある。そこで当授業で実施した模擬テスト結果を分析考察し、一応の知見を得たので、その結果を報告する。

2. 本稿の目的

本稿では、2006～2011年度まで6年間の「検定英語I&II」授業において、各開講期末に実施した模擬テストのスコア結果を分析して考察し、履修者の英語力の多面的推移を報告する。そのことによって、本学学生の英語力の現状の一端を示し、今後の授業の改善に有益な知見を得ることを目的とする。

3. TOEICテストについて

TOEICテストは、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストで、現在120ヶ国で実施されている（Educational Testing Service、以下ETS, 2012）³⁾。テスト形式はリスニング（45分間100問）、リーディング（75分間100問）合計2時間で200問に答えるマークシート方式であり、判定方法は合否ではなく10点から990点までのスコアで評価される。

TOEICテストには公開テスト（年9回）と、実施団体が随時実施できる団体特別受験制度（IP：Institutional Program、以下IP）の2つの受験方法があり、テスト形式は同じであり、難易度の差もない。リスニングセクションもリーディングセクションも最高点は495点で最低点は5点である。両セクションの合計点となるトータルスコアの最高点は990点、最低点は10点である⁴⁾。受験者数は、世界で年間約600万人（TOEICプログラム全体 2010年）、日本で年間227万人が受験し、国内では多数の団体（企業、官公庁、学校等）でTOEICテストを採用し活用している（ETS, 2012）³⁾。

4. 模擬テストについて

「検定英語 I&II」の授業において、2006年度から前期と後期末に TOEIC 形式の模擬テストを行った。模擬テスト形式は TOEIC 公開テスト/IP テストと同じ方法で行った。テストは「TOEIC 新公式問題集」(国際ビジネスコミュニケーション協会発行: Volume 1~4)¹⁾を参考にし、採点方法もそれに準じた。但し、このスコア換算表は練習テストの為のものであり、実際の TOEIC テストのスコア算出には使用されていない。算出の結果はトータルスコアレンジとしてスコア数値の範囲を示す。

データ分析のために、トータルスコアレンジの中間数値を取り、これを履修者の模擬テストのスコアとした。履修者の中には、模擬テスト後に公開テストや IP テストを受験した者がおり、そのスコアと授業での模擬テストスコアに大差はなく、模擬テストがほぼ正確に履修者の英語力に応じた TOEIC スコアを算出していると考えられる。

5. 分析方法の概要

本稿では下記の観点に基づいて分析を行った。

- (1) 6年間全体のセクション別とトータルスコアの平均点、最高点、最低点及びトータルスコア分布
- (2) 開講期別のセクション別とトータルスコアの平均点
- (3) 複数回受験者の上昇量分布と回数ごと平均トータルスコア及びその比較

6. 結果と考察

6年間の模擬テスト実施回数は12回で、受験者数は延べ189名である。この中には同一人物が複数回受験した場合も含まれる。データ分析の結果と考察を下記に示す。

- (1) 6年間全体のセクション別とトータルスコアの平均点、最高点、最低点及びトータルスコア分布
表1に6年間全体のセクション別とトータルスコアの平均点、最低点を示す。

表1 6年間全体のセクション別とトータルスコアの平均点、最高点、最低点

	リスニング	リーディング	トータルスコア
平均	224.36	163.75	388.05
最高点	463.00	338.00	765.00
最低点	83.00	43.00	190.00
延べ受験者数	189		

2011年度 IP テスト所属学校別平均スコア(TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011)²⁾では、全国の短大生受験者のリスニングは239点、リーディングは163点でトータルスコアが402点である。当授業履修者の平均点はトータルスコアが388.05点で14点近く下回っている。

セクション別を見ると、リスニングでは当授業履修者のスコア平均点は224.36点で、全国の短大生平均より15点近く下回っているが、リーディングではわずかに上回っている。

全国の短大生の平均スコアは1, 2年生対象である。しかしながら、当授業履修者の模擬テスト受験者

は9割近くが1年生である。このことをふまえ、2011年度IPテスト学年別平均スコア(TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011)²⁾を見ると、短大1年生はリスニング222点、リーディング149点でトータルスコアが371点である。当授業履修者のスコア平均が全国の短大1年生平均よりも上回っている。リスニングは大差ないが、リーディングは15点、そしてトータルスコアは17点近く上回っていることがわかる。

IPテストを実施した短大の学部について詳細はわからないが、恐らく英語科や国際関係学科等が多く、受験目的意識も動機付けも高く、英語力も高い傾向があると予想される。そのような状況下で、当授業履修者の平均スコアについては、むしろ好成績であるといえる。自由選択科目であることから、英語に興味を持つ学生が多いことも事実である。

次に6年間全体の平均トータルスコア分布を図1に示す。

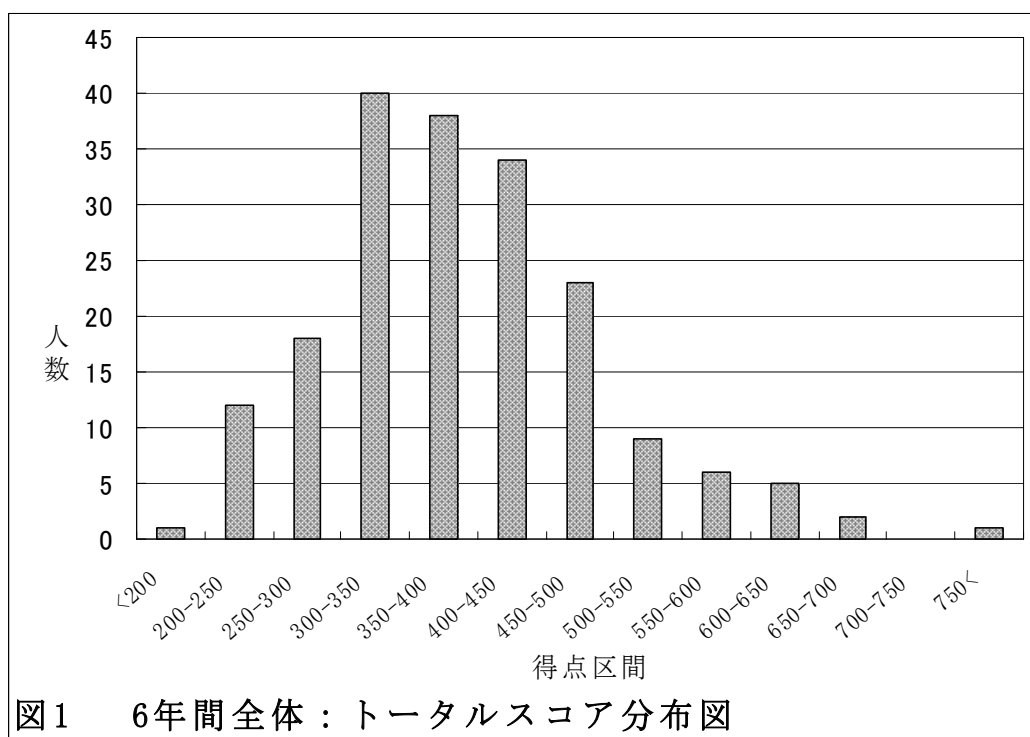


図1のトータルスコア分布を見ると、300～350点が一番多く、次に350～400点、そして400～450点である。凡そ6割近くの履修者が300～450点のスコア範囲内である。このスコア範囲の評価としては、「通常会話で最低限のコミュニケーションができる」レベルである(TOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表：ETS)³⁾。

一方、470～700点の高スコアを取る履修者が多くいることも注目すべきである。このスコア範囲の評価としては、「日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる」レベルである(TOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表：ETS)³⁾。

6年間全体で最高点である765点は1名の履修者であるが、このスコアの評価としては、「どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている」レベルである(TOEICスコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表：ETS)³⁾。

低スコアレベル分布を見ると、僅かではあるが、このスコア範囲に属する受験者がいる。220点以下

は「コミュニケーションができるまでに至っていない」レベルである(TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表：ETS, 2012)³⁾。

これら6年間全体の模擬テストスコア結果から、履修者の英語力は広範囲に及んでいることがわかった。

(2) 開講期別のセクション別とトータルスコア平均点分布図

開講期別のセクション別とトータルスコアの平均点分布を図2に示す。

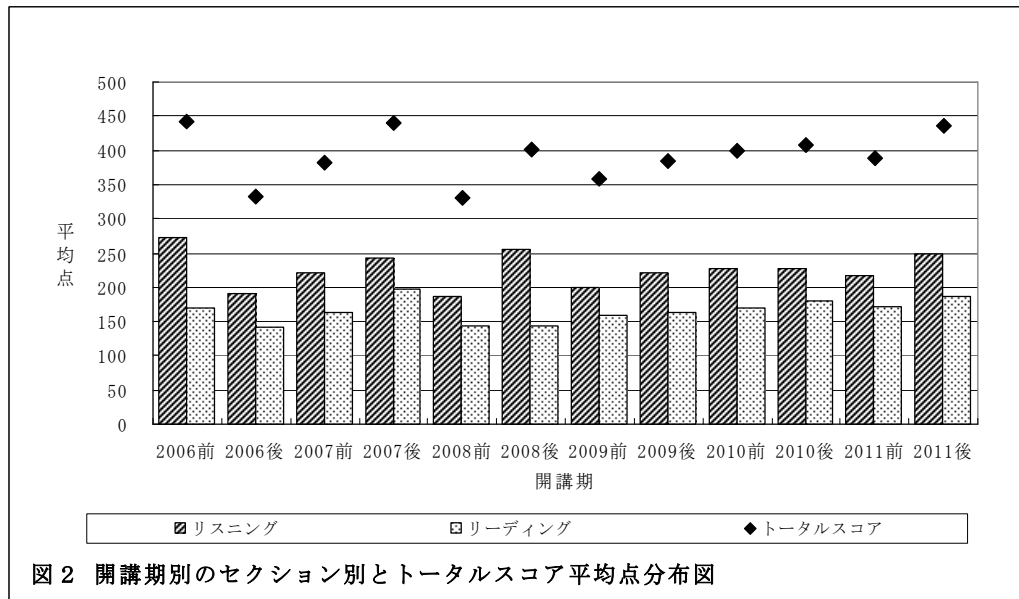


図2 開講期別のセクション別とトータルスコア平均点分布図

トータルスコアを前期と後期で比較すると、2006年度は後期において前期より著しくスコアが下降しているが、それ以外は前期よりも後期のスコアが上昇している。前期と後期の履修者が全く同一ではないが、前期に模擬テストを受験し、更にスコアアップを目指し、後期に再度模擬テストを受験する学生が多いことから、後期にスコアが伸びていることは良い傾向である。

2006年度に後期のスコアが著しく下降した原因としては、前期に600点以上を取った学生が3人いたが、そのうち2人が後期の模擬テストを受験しなかったことも一因と考えられる。

平均トータルスコアが400点以上は全体の半数の6回に達する。平均スコアの高低は履修者の過去の英語学習歴によって左右される。例えば、英語教育に重点を置いている私立高校、或いは、県立高校の英語科や国際関係学科等出身の履修者は、1年生でも高スコアを取る傾向がある。又、社会人を経験して入学した当授業履修者は、入学前の自己学習経験で高スコアを取る傾向がある。このように、英語学習歴が多い履修者が模擬テストを受験すると平均スコアが高くなる傾向がある。

セクション別に見ると、何れのテストもリスニングスコアがリーディングスコアを上回っている。全国のデータでも、過去5年間の公開テストとIPテストどちらも、リスニングスコアがリーディングスコアを上回っている(TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011)²⁾。当授業履修者も、この傾向と一致する。2006年度から大学入試センター試験でリスニングが導入され、音声面が以前より重視されるようになったことに起因する可能性もあると考えている。リスニングもリーディングも後期が前期よりも伸びる傾向にあるが、伸び率にはばらつきがあり、両セクションが同じ伸び率を示すことは難しい。例えば、2008

年度にリスニングが大きく伸びているが、リーディングの伸びは小さい。全体的にリスニングと同様にリーディングも伸びれば、トータルスコアの上昇が期待できる。

(3) 複数回受験者の上昇量分布と回数ごと平均トータルスコア及びその比較

2回以上受験者の上昇量分布を図3に示す。

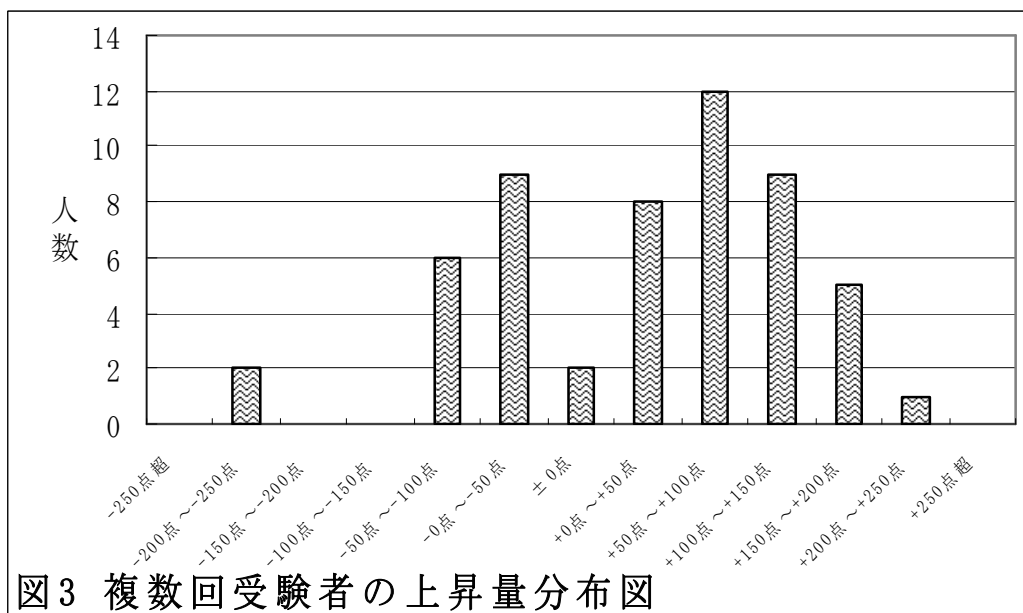


図3の分布を見ると、64.8%の複数回受験者のスコアが上昇し、35.2%の複数回受験者のスコアが非上昇であることがわかる。上昇量では、50~150点の上昇が多く、非上昇では0~50点のスコア下降が多いことがわかる。スコア下降の主な原因としては、授業出席回数が少ないことや、毎週授業開始時に行う単語テストに真摯に向き合えなかった、等が挙げられる。単語テストは30点満点であるが、毎週満点を取る履修者もいるし、一桁台の点数から伸びない者もいる。この毎週の単語テストに真面目に取り組んでいる履修者は模擬テストスコアも上昇している。

次に複数回受験者の回数ごとの平均トータルスコアとその比較を表2に示す。

表2 複数回受験者の回数ごとのトータルスコアの平均及びその比較

受験回数	初回平均		2回平均		3回平均		初回/2回目との差の平均		初回/3回目との差の平均		2回目/3回目との差の平均	
	平均点	変動係数	平均点	変動係数	平均点	変動係数	平均点	変動係数	平均点	変動係数	平均点	変動係数
2	377.12	23.31	411.62	24.14	—	—	34.50	272.65	—	—	—	—
3	471.50	21.25	516.25	23.85	629	9.80	44.75	218.08	157.5	76.39	112.75	78.03
全体	384.11	23.77	419.37	24.73	629	9.80	35.26	264.94	157.5	76.39	112.75	78.03

延べ189名の受験者のうち54名が2回受験者、3名が3回受験者である。「検定英語I」と「検定英語II」両方を履修すると模擬テストを2回受験することになる。3回受験者というのは、単位に関係なく、

自主的に聴講生として授業に出席し、模擬テストを受験した学生である。

図3に示した分布では、上昇量が100点前後の履修者が多かったが、前述の通り全ての複数回受験者のスコアが上昇した訳ではなく、非上昇者を併せて平均した。表2の平均上昇量は34.50点(初回～2回目)であった。

表2が示すように、複数回受験者のトータルスコアは平均して伸びていることがわかる。初回の模擬テストを受験し、更に授業を履修してTOEICの問題形式に慣れることから、スコア上昇は当然のこととも言える。問題は上昇量である。平均上昇量が34.50点をもう少し上昇させることができれば良いと考える。

「検定英語 I&II」は1年間で履修が終了する。在籍する2年間をかけて履修し、模擬テスト受験回数が増えれば、更にスコア上昇が期待できるかもしれない。しかし現実としては、2年生の多忙な時期に自由選択科目を履修することは困難であろうと考えられる。

3回受験者の3名は目的意識や動機付けが明確であったと考えられる。3名のデータだけで客観的なことは述べられないが、3回目の平均は629点と高いスコアである。この学生達は自己学習を積極的に行い、公開テストも自主的に受験していた。

7. まとめと今後の課題

冒頭でも述べたように「検定英語 I&II」は自由選択科目であることから、履修者は受講に対してある程度の動機付けは持っている。しかしながら、模擬テスト結果の検証と考察を行った結果、TOEICスコア上昇の為に、更なる動機付けが必要であることがわかった。

TOEICテストで高スコアを取る裏技なるものも多くあるが、本学学生にとっては基礎的な英語力を身に着けることが不可欠である。これまでも授業開始時に単語テストを実施したが、学生の語彙力増強が一番必要なことである。語彙数が増えると、どのセクションでもスコアの伸びは期待できる。

毎週の単語テストは学生からの評価も高い。学生自身が語彙不足を十分に認識し、強制的な単語学習が必要だと感じているようだ。

リスニングセクションは語彙数が増えても、学生自身の単語の音声インプットとアウトプットなしに、リスニング力にはつながりにくい。このため授業ではディクテーションやシャドウイングを行っているが、更なる取り組みが必要である。

リーディングセクションでは文法的知識を必要とする問題が頻出するので、解説で基本的文法を再確認している。この部分は日本人が一番スコアを上げやすいとされているが、現実には厳しく、基本的文法知識の必要性を常に実感している。

90分という限られた時間で、リスニングとリーディングをバランスよく指導することは至難の業である。教師だけが、予定した内容を必死に消化しようとしても効果は薄い。やはり最終的に必要なことは、学生が学習に対して「動機付け」や「必要性」を認識することである。そうすれば、積極的に自己学習をして、週一回だけの授業が更に効果的なものとなる。学生による「授業評価」の項目でも、「学生自身が復習や予習をして授業に臨んだ」は毎回低い評価である。自己学習の必要性を授業でも学生に伝えていきたい。語学学習においては特に大切なことである。

英語コミュニケーション能力を上げるには、具体的な勉強方法の他に、英語に対する固定観念の変換も必要である。これまで言われてきた「きれいな発音で、ネイティブのように話す。」は、日本人を益々寡

黙にさせる。「恥ずかしさ」や「正確性」にとらわれることなく、今の自分の英語力で伝えることが大切であり、つたない英語でも、内容が伴っていれば堂々とコミュニケーションできることを学生に理解させることが肝心である。これは TOEIC テストのスコアアップ指導とは矛盾するかもしれないが、グローバル化する世界で生きていく為には重要なことである。

本報告で扱ったデータは数少ない履修生の6年間のデータであり、決して大きな集団からのデータではないが、ここで得た知見を今後の授業内容に反映させ、自由選択科目である当授業を履修する学生の期待に沿うよう努力していきたい。

謝 辞

2001年度から「検定英語 I&II」を開講するにあたり、ご理解とご協力を頂いた会津大学短期大学の教職員の皆様には心から感謝の意を表します。また、夕方の時間帯にも関わらず、自由選択科目である「検定英語 I&II」を履修登録した学生にも敬意を表します。

参考文献、URL

- 1) 国際ビジネスコミュニケーション協会、「TOEIC 新公式問題集」Volume 1～4
- 2) 国際ビジネスコミュニケーション協会、「TOEIC テスト DATA & ANALYSIS 2011」2012
- 3) Educational Testing Service, TOEIC <http://www.ets.org/toeic/>
- 4) TOEIC 公式サイト、 <http://www.toeic.or.jp>

